田中 宇

たなか・さかい：共同通信社の記者を経て1997年にマイクロソフトに転職。「MSNジャーナル」を日本初の本格的コラムサイトに育てる。現在、毎週配信している国際ニュース解説のメール読者が16万人を超える。Jump www.tanakanews.com

組織におもねらない“豪傑”が揃う
北京の「電脳梁山泊」

香港のカンフー映画などで、敵どうしだった拳術使いが決着のつかない決闘を繰り広げたあと、互いの気概に感じ入り、その後は一転して仲間になるというシーンがよくある。豪傑が「梁山泊」に集い、互いに戦って友情をはぐくむ物語「水滸伝」は、その元祖とも言える12世紀のお話だ。そんな梁山泊の伝統は中国のお家芸だが、それは物語の世界だけのことだろう……と思っていたら、意外や意外、今でも梁山泊はしっかり中国に存在していた。しかもそれは、時代の最先端を行くITビジネスのなかにあった。

先日北京を訪れた際に、ソフトウェア制御方式のブロードバンドアクセス技術（Set Top Computing）で世界のトップを行く「北京華諾信息技術」（Cathay Roxus）の幹部、ホワン氏と会った。20代後半の彼は「一番苦労していることはなんですか」との問いに「技術者の統率がとりにくいこと」と答えた。幹部級の人材を採用し、部門ごとに技術者たちを管理しようとしても、技術者たちは自分より技能が上だと認めた人の言うことしか聞かないという。

それも管理職としての能力ではなく、プログラムを書く技能や、技術の詳細に関する知識など、管理される側の技術者と同じ分野において尊敬に値する人でないとだめなのだという。下から「命令したいのなら、俺に勝ってからにしろ」と挑まれてしまうのだそうだ。

多分野の技術に精通した人なら、20人や30人の技術者がやっていることの全体を把握できるかもしれないが、100人以上の大組織の技術陣をまとめるのはほとんど不可能だろう。「世界的にみても中国の技術者は優秀だが、管理役を探せないので大企業を作るのが難しい」と彼は言う。水滸伝の梁山泊には108人の豪傑がいたが、そのぐらいが上限なのかもしれない。

ホワン氏自身、その経歴や抱負を聞けば「電脳豪傑」の1人だと呼びたくなる。理工系では中国ナンバーワンの精華大学でコンピュータ工学を学び、1996年に大学院を終了した彼は同大学系列の企業に入り、1年後にはIBMに引き抜かれた。ところが「大企業にいるとおもしろくない」と、昨年、設立間もないインターネットバンキングのセキュリティー技術の会社に移り、技術マネジメントを担当、同社が成長してくると、今度は「技術的にもっと大きな挑戦をしたい」と考え、現在の会社に移った。ストックオプションなどで巨額の収入を得るより、技術的なことに没頭しているのが好きで、35歳を過ぎたらビジネス界から足を洗い、大学に戻って研究を続けたいと言う。

電脳世界の梁山泊ぶりは、中国本土だけに限らない。台湾でゲームソフトの開発を手がける「開頂多媒体」Jump の川上東社長（執行董事）も「同じような状況が台湾にもある」と語る。ただ台湾の場合、戦前に日本の占領下にあった影響からか、大陸より組織内の上意下達に問題が少ないように見受けられる。

組織内の上下関係を正当化するメカニズムとして、従来の日本には「年功序列」があり、欧米には「職能ごとの階級」などがあるが、近代の中国では、文化大革命など政治における権力闘争の激しさからもわかるように、力による支配がモノを言う状況だ。それが「電脳梁山泊」の下部構造にあると言えそうだが、ハイテク分野では1人の天才技術者が世界を変えてしまうことがよくあるだけに、日本のように能力の均一を生み出す社会より、中国のような「豪傑」を輩出する社会のほうが、今後の世界には合っているのかもしれない。

Jump www.e-media.com.tw

illustration : Harada Kaori

©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.